陳述書

佐藤 進 さんの 眼球 上 転時の 状態 について

私 は佐藤 進 さんが 眼球 上 転した時の 状態 について以下の通り 陳述 いたします。

なお、佐藤 進 さんについて 柊 寮 において平成１３年４月１日から生活支援を担当していました。

１．基本的生活 習慣 の 状況

佐藤 進 さんの金銭と菓子、コーヒーは、本人および保護者の依頼により 職員 が管理していた。買い物の内容や行き先は、 職員 と相談し、予定した品物の 購入 を単独で 行 っていた。その他は、すべての生活場面において、自己の意思、自己判断に基づいて行動し、基本的生活は自立していた。 上 転時は、意識レベルが低下するという医師の所見はなく、実際の生活動作にもおおむね支障がなかった。

＊金銭等の管理依頼について

本人は、金銭を計画的に使用せず、手にする限りを一時に使いきり、さらに際限のない金銭や物品 購入 要求 にいたるため、佐藤氏の預かり金等については、１年ごとに、保護者からの依頼書を受けて、 職員 が管理していた。

＊普段の買い物

週末 、 休日 のうち、 週 に１回以内と決め、高幡台団地セイフー、百草団地スーパーヤマザキ及び団地 商店 街に単独ででかけ、買い物を行っていた。

月刊誌「 明星 」、テレビガイドは、高幡不動駅前の京王ストア内書店 で買い、菓子、缶コーヒー、もなかアイス、歯磨き、歯ブラシ、マスク、菓子パン等を、高幡台団地セイフー、百草団地スーパーヤマザキ及び団地 商店 街で 購入 していた。本人と相談して、一度の買い物で使う金額は、一ヶ月の作業 報償 費の額面としていた。買い物の内容は特に制限しなかったが、本人が「○○買っていい？」と 職員 に同意を求めていた。

＊　コーヒー、菓子の管理

コーヒーは精神科医と本人の約束で一日３杯と決めていた。本人保管では 量 を守れないので、 職員 が本人ロッカーにいれて管理していた。

菓子は、以前に好きなときに好きなだけ食べていたことで太りすぎた為、 職員 が本人ロッカーにいれて保管し、 本人 が決めた時間と 量 を守ってもらえるよう 協力 し

ていた。

① 上転時の歩行について

上転の状態（目が上を向いた状態）であっても、高幡不動駅からの２キロ近い距離を危なげなく歩き、寮まで戻ってくることができた。歩けなくなったり、うずくまる様子に出会ったことはない。

＊上転は、寮外出、社会参加外出、買い物等の歩行場面でもよくみられた状況である。

＊一ヶ月に一回程度、職員の付添いで、高幡不動駅周辺での買い物を行っていた。高幡不動駅から寮までの道のりは、歩道がなく、車との距離が保てない場所や、歩道の凸凹が多く、信号機のある交差点も３箇所ある。目が上を向いた状態では正面や足元が見にくいため、頭を下げて歩いていた。

② 上転時の入浴について

本人自身が、上転の状況に応じて入浴を控えたり、時間をずらすなどして調整していた。入浴中に上転が起きた場合でも、入浴中のすべての動作について支障をきたす部分はなく、引き続き入浴を続けることに不安を抱く場面はなかったが、本人が自発的に入浴をやめ、洗濯をした後に、トイレにこもることも多くあった。（上転の状況や回数については別紙記録参照－１３年度の入浴中の上転は３回）また、浴室で上転し、トイレに入った後、上転の持続した状態で再び入浴を続けることがあり、このときも本人の様子に不安はなかった。

このように、入浴時に通常の上転が起きたとしても、本人の意識には重大な低下はなく、四肢のコントロールも十分できていたため、単独入浴が生命に関わる危険な状況であると予測することは困難であつた。

＊本人が入浴を控えることはほとんどなかったが、夕方にトイレにこもり、夕食の時間になってしまった場合には入浴しないことがあった。大抵は夕食時間にかかっても単独で入浴していた。また、上転の有無で入浴を控えるというより、その日の気分で入るが入らないかを本人が決めていた。

＊「時間をずらす」というのは、上転がおさまってから、あるいは入浴したくなってから入浴していた状況を指している。

＊「浴室での動作」とは、体を洗い、その後に頭を洗い、シャワーを浴び、洗面道具を隔壁上部に置き、湯につかり、温まると浴室を出て行っていた動作一つ一つの

ことである。

＊「洗濯」は、本人が全行程を単独で行ってし、た。入浴後、着替えた衣服を洗濯機に入れ、電源スイッチとサイクル選択スイッチを押し、水を水槽にためている間に、居室に洗濯洗剤を取りに行き、洗剤を洗濯槽に入れてふたをするという流れであった。　そして洗いあがった洗濯物は、自分で乾燥機に入れるか、ハンガーに干していた。

＊上転中の本人が自発的に浴室から出て、洗濯をした後に、トイレにこもるという動き　は、上転の状況でも自己の生活習慣のとおりに日課を追って生活できていたことを示している。

③上転時の食事等について

食事や、おやつを食べている最中に上転を起こしていることがあった。誤嚥などの恐れを抱いた場面はなく、自然に食事を続けていた。食後は流しに食器を下げ、スポンジに洗剤をつけて食器を洗うという、普段どおりの動きであった。

＊週末の買い物から帰ってくると、上転を起こしていることが多かった。本人はその状態にあっても、買ってきたおやつを談話室のソファーに掛けて食べていることがよくみられた。食事中の上転はこの２年間で数回確認していた。危険な場面ではなく、記録していないので確かな回数はいえない。

④上転時のトイレ使用について

普段の排便時は１５分、上転時は１時間程度である。本人は、上転時においても、排便、排尿をしていた。鼻のとおりがわるくなるためトイレットペーパーで何度も鼻をかみ、排便を終了しても、拭き残しを気にして何度もお尻をふいていた。また、残尿感があるようで、尿道から尿をしぼりだすしぐさも繰り返していた。

＊　排泄時の定期的な様子確認

食事を呼びかけに行ったときや、他の利用者状況の確認に際しての、本人状況は確認していた。

上転時であっても、排泄が自立している本人には、トイレ使用時の定期的な様子を確認する必要はなく、特にそういう意味での確認は行わなかった。

2、安全への配慮と自己決定の尊重について

職員が、佐藤進さんに接する際には、本人の対人関係において、意識の中心にある「力関係」＝「暴力」を排除し、人間同士の信頼関係を大切にした。本人の人権を重んじ、本人の意思を最大限尊重することと安全への配慮を生活支援の根幹におき、万事、本人の意志に基づいて生活を組み立てていた。入浴については、希望すれば毎日入浴できるよう、入浴可能な時間帯を拡げ、一緒に入浴しない場合でも、各利用者の入浴状況に気を配っていた。安全面では、脱衣場、浴室の要所に滑り止めマットを敷いたり、トラブルになりやすい方同士の同時入浴を避けるなどして浴室内の安全を確保するとともに、本人の体調に合わせて入浴を控えていただいたり、健康維持に支障のない範囲で、入浴しないことも本人の自由意思を尊重していた。

＊　本人の意志に基づいた生活の組み立て

起床－平日は、作業訓練開始時間の午前９時にあわせ、訓練棟への移動時間、朝食摂取時間、食後のコーヒータイムを差し引き、目安の午前８時までに起床していただけばよかった。通常は自分で起きており、起床を促すことはほとんどなかった。

週末、休日の起床は、本人に任せていた。

食事－午前８時を目安に、利用者全員に朝食を呼びかけていた。本人は呼びかけるまでもなく食卓についていた。パン、ご飯の選択は本人の自由で、パンを好んで食べていた。

作業訓練への参加－参加は自由である。週末、休日の買い物１回に使用できる金額は、１ヶ月の作業報償費の額面と決めていた。休まず参加し、意欲を持って作業に従事すれば額面は増えるということである。こうしたことで、本人はほとんど休むことなく作業に参加していた。

余暇時間－余暇時間は本人の自由意思で過ごす。テレビ、ビデオ、音楽鑑賞、雑誌読みなどで過ごしていた。週末、休日には、週に一度買い物にでかけていた。

掃除－土曜の午前は居室掃除に徹するという週の日課を習慣化するため、職員が本人の求めに応じて居室の掃除や、リネンの交換を手伝った。

洗濯－本人が全行程を単独で行っていた。大抵の日は、入浴後に行い、夕食前に干し終えていた。入浴が夕食時間に食い込み、遅れるときには、洗濯機を回

すまでして、夕食後に洗濯物を乾燥機で乾かすが、ハンガーに干すかを自己判断で行っていた。

入浴 － 入浴中の他の利用者とのトラブルを心配し、どのように入浴するが毎日その時々の本人の最終判断で入浴を実施してきた。同性職員が一緒に入浴しない場合は、Aさん、B さん、C さん、D さんとの同時入浴を避けるようにして、浴室での安全を保ってきた。佐藤さん自身も、トラブル時の危険性を自覚し、女性職員のみの体制のときは、入浴を控えたり、単独で入浴できる時間を選んで入浴していた。

３、地域生活移行への取り組みについて

柊寮では、嘱託医に相談した際の嘱託医の意見と、医療保護入院時の主治医の意見を積み上げ、佐藤進さんが当園に入所した昭和６０年７月～平成７年７月までの様子の変化への対応については、以下のようであったと共通認識し、本人の自立支援の方向を模索してきた。

本人の限りない金銭や買い物に対する要求に対し、さまざまな対応を試みていたが、入所以前の本人の、無秩序で無軌道な行動傾向は改まらず、施設生活においても継続し、さらに増長していった。佐藤進さんには、相手を思いやる心が未成熟で、誰に対しても「力関係」が意識の中心にあり、「自分の要求に職員が応じる」という場面をできるだけ多く作ることによって、職員との「力関係」を優位に保ちたいとしい思考であった。そのため、「要求する場面を作るための要求」が、際限なく続くといったしくみである。

本人は、要求するすべてを叶え、約束外の購入地で購入し、予定購入品以外のものを自由に購入するということを重ねたことにより、要求に歯止めがなくなり、自己抑制をしなくなった。粗暴行為については、他の利用者の模倣から始まり、からだの成長につれ、トラブル相手との力関係が逆転し、一方的な暴力に及ぶようになった。こうした本人の行動に対して職員は、けして断罪せず、本人の事情を聞き、トラブルの仲裁を行っていた。本人の未熟さ、人間関係構築の手段の稚拙さ、集団生活への抵抗、思いやりが育っていないことなどのハンデーを考慮し、職員は受容、共感的姿勢に徹した。

本人はこうした職員の姿勢につけこみ、「職員は俺のいいなりだ。俺は自由なんだ。俺の金を出せ。俺は何でもできる。」という態度に変わり、女性職員に対しては、自分の気持ちに任せ、からだに触る、いやらしいことを言う、抱きつくなどの性的

いやがらせもするようになった。そして、さらには職員、他の利用者に対し、直情的、高圧的に振舞う状態になり、全てにおいて自己中心的で、短絡的な暴力に訴える生活ぶりになった。

本人が「無秩序」、「無軌道」、「粗暴行為」を繰り返す目的は、自分の力を誇示するためであり、相手との力関係を優位に保つことによって「施設における安全で安心な生活」を手に入れようとしていたのだという見方である。

柊寮は、佐藤さんがひいらぎ寮に移って以来、本人の地域生活復帰の可能性を追求するにあたっては、まず、本人の無秩序で無軌道な行動傾向を修正しなければ、地域生活復帰はなし、と考え、力関係から信頼関係への転換、本人の自己統制力を高めること、きまりを守る精神を養成することなどを地域生活に向けた課題としてきた。

本人が柊寮に移ると、本人の粗暴行為は徐々に減少し、平成１３年以降は暴力と呼ぶべき行為はみられなくなった。性格も穏やかになり、職員の助言を素直に受け入れるようになったため、本人と、多くのことを話し合い、より良い選択肢を提言した上で、最終的には本人の意思決定と自己責任による生活をしていただいた。

買い物などの、本人単独の外出を実施していただくか判断する際、本人の体調、目的地、購入の品、持参する金額など、本人と細かいことまでその都度話し合っていた。本人の体調が不良でも、悪天候でも駅までの買い物を希望された時は、近所のスーパー（高幡台団地セイフー、百草団地スーパーヤマザキ及び団地商店街）での買い物を勧めたり、買い物に出ることを控えるようお願いしていた。また、高額な小遣い、持ち帰れないほどの買い物を希望された時は、必要最小限とするように助言し、本人も素直に応じた。

入浴については、入りたいときに入っていただくという、本人の意思を尊重した。安全への配慮については、これまでの発作時の入浴の状況と、本人が関わる浴室内でのトラブルの状況を、本人がよく理解していたため、入浴するタイミングを本人の判断に任せたり、浴室の状況を確認し、職員が促して入浴していただいた場合のどちらもあった。

＊本人の要求の内容や発言、職員の助言など、本人との細かなやりとりの過程で示されたものはほとんど記録に残していないため、その内容については、明確に説明できない。

４、個別援助計画について

佐藤さんのご家族は、佐藤さんが、過去の長い年月にわたり、他者に向けた暴力行為の再発がないことを念願していたため．ご家族の心配事は、他の利用者に迷惑をかけてないか、自己の抑制ができているか、職員の助言を受け入れているかということなどだった。

個別援助計回の内容については、懇談の際に同意を頂いていたが、特に佐藤さん自身の「生活日課」に対する意見や要望はなく、入浴に関しての配慮や要望も一切なかった。

５、ご家族からの入浴に対する要望について

ご家族からの入浴に関する要望や、家庭帰宅時の入浴状況についても、話をしていただいたことはなかった。

＊平成７年～平成１５年１月まで、ご家族から、本人のリスクに関する情報は頂いてない。

６、佐藤さんの入浴に関して、特に留意していた事項

入浴中の発作が危険でなかったことは職員と本人双方で確認していた。本人とは、日々、その都度入浴をどうするか、浴室の状況を伝え、入るタイミングを話し合い、その時々の本人の最終判断で入浴を実施してきた。

浴室で本人が他の利用者とトラブルになり、その隙に、双方が転倒し、怪我をする危険があるため、職員が一緒に入浴しない場合は、A さん、B さん、Cさん、D さんとの同時入浴を避けるようにして、浴室での安全を保ってきた。佐藤さん自身も、トラブル時の危険性を自覚し、女性職員のみの体制のときは、他の利用者との同時入浴を控えたり、単独で入浴できる時間を選んで入浴していた。

＊　本人との入浴に関する取り決めや、支援の方針については、特に文書で残したものはないが、佐藤さん自身が他の利用者とのトラブル回避をすすんでしていたことで、円滑な入浴ができていたことを信頼し、実施してきた実際の状況を示したものである。

《佐藤進さんの眼球上転時の状態》

私、猪俣健治が、佐藤進さんへの支援を行っている時に起きた眼球上転時の様子について、記憶の鮮明な３例を述べさせていただきます。

１、　平成１４年５月５日

当日の午後、園からおよそ２Ｋｍ離れた高幡不動に、本人を含め、利用者４人に、実習生１名と私が付き添い、散歩に行きました。佐藤さんは．駅前のスーパーマーケット「おおた」の外にある自動販売機で缶コーヒーを買い、その場で飲んで、帰り道に向かいました。「銀だこ」というたこやきの店前に差し掛かる頃から眼球上転が始まり、寮に帰りつくまでその状態でした。「気をつけてよ。足元見えるんですか？」と質問すると、「見える。大丈夫。」と答えました。帰路は、急で長い上り坂が続くということもあって、歩く速さはゆっくりでしたが、立ち止まることはなく、危なっかしい歩調でもありませんでした。

２、　平成１４年１０月２５日

この日は社会参加外出で昭和記念公園まで園パスで行きました。私は出発の朝９時より、ずっと佐藤さんに付き添っていました。佐藤さんは、芝生で幕の内弁当を食べた後、あらかじめ配られていた「カール」と「おっとっと」という菓子を一気に食べ切りました。その後、佐藤さんも含め、数人のグループ行動になり、公園内の売店を巡ってビール２缶、ソフトクリームを食べ歩いたのです。１軒目の売店に近づいた頃から、眼球上転し、売店裏のトイレにかぎを掛けずに６０分こもっていました。トイレでは大使、小便をしながら、辛そうに鼻をかんだり、陰部をはたいたり、絞ったりという動作を繰り返していました。私が、「大丈夫？みんなが待っているので少し急いでね。」と声をかけると、佐藤さんは早口で、「大丈夫。」と答えました。トイレから出てきてもまだ上転していましたが、売店でビールを購入し、テーブルに運び、腰掛けるとすぐにプルトップを開け、「おいち、おいち」といいながら飲んでいました。私が「今日は特別、ビール飲めるだけ飲んでいいよ。」と話すと「いいの？本当に？」と喜びました。店を発つときも、まだ上転ぎみでしたが、かなりの距離を歩き、集合時間の迫る頃、集合場所近くの売店で２本目のビールとソフトクリームを購入し、ビールは慌てて流し込んでいました。この時は上転がおさまっており、私が「ビール２本飲んだことは内緒だよ。」というと、「内緒ね、内緒ね。いのまたー」と言いながら、私に抱きつき、喜んでいました。

３、平成１４年１２月１４日

昼食後、佐藤さんに、歌声サークル「谷間」のコンサートに行ってほしいと話し

ましたが、それを断り、単独で買い物に行き、上転気味で戻ってきました。２階に上がると眼球上転していました。買い物袋を持ち、２階娯楽室のソファーに腰掛けました。缶コーヒーを開けて一口飲むとテーブルの角にコーヒーを置き、チョコモナカジャンボというアイスクリームを開封し、大きく１口、そして２口かじりました。またコーヒーを一口含み、そしてアイスを大きく１口、そして２口かじり、充分溶けない大きな固まりのまま「ゴクッ」と音をたててアイスを飲み込んでいました。アイスも、缶コーヒーも終えたところで、私は、「コンサートまだやってるよ。いってきたら。」と誘いました。するとすぐに佐藤さんは腰を上げ、そそくさと缶やごみを片付けながら「行ってくる。」といい残して、つばき寮２階の会場に一人で出かけました。この間、ずっと眼球上転の状態でした。

平成１６年３月１日　柊寮職員　猪俣健治（自筆）　印

陳述書

佐藤 進 さんの 眼球 上 転時の 状態 について

私 は佐藤 進 さんが 眼球 上 転した時の 状態 について以下の通り 陳述 いたします。

なお、佐藤 進 さんについて 柊 寮 において平成１３年４月から平成１４年まで生活支援を担当していました。

１、 眼球 上 転時について

① 時間帯

眼球 上 転の 現 れるのはまちまちであった。

外出 時に 喜 びのあまり興奮したとき、

自分の思うように買い物ができたとき、

逆 に約束を守れなかったとき、

訓練棟の作業から帰ってきたとき、

食事前・中・後、

散歩の 最中

トイレや 入浴 前・中・後、

のように生活全体に見られた。

② 受け答え

眼球 上 転を起こしているとき、 職員 の声かけに答えることができたほど意識はしっかりしていた。

上 転時に 職員 が様子について尋ねるなどすると身振りや言葉で返事をする事が見られた。

③ 行動・様子

（１） 眼球 上 転 中 の行動

a 買い物

上 転が起きているときでも、買い物は自分が望む通りに行なってきていた。

b 歩行

本利用者に付き添い高幡台団地や百草団地からの買い物をして帰寮 中 に眼球 上 転が 現 れたときの歩行はしっかりと歩くことができていた。

単独で散歩や買い物をして上転しながら帰寮したことがありましたが、帰寮後に疲れている様子は見られませんでした。

c　入浴

入浴前なら　自分自身で上転が終了してからと返事をしました。

入浴中は　自分自身でも早々に入浴を終了していました。

浴槽および浴室から出るとき安全を自ら確認し着替えをして出ていました。

d　食事

眼球上転をしているときでも誤飲の危険は見られなかった。

（2）眼球上転中の様子

a　トイレにこもる

眼球上転中に「トイレにこもる」といった行動が良く見られました。

上転が終了するまでの間トイレに長い間座り、鼻をかんだりお尻を拭たりしていました。この時に前（床）に倒れこむような危険は見られませんでした。

トイレにこもる状態は数分で終わる時もあれば２０～３０分ときには４０分にわたることもありました。

寮外出時にこのような状態が見られました。トイレにこもっている状態にあっても職員の声かけに応じることができていました。このような状態でも意識はしっかりとし、会話もでき危険は感じられなかった。

b　鼻をしきりに気にする。

眼球上転をしている最中にしきりに鼻をこする、鼻をかむといった（落着かない）様子でした。

c　会話

眼球上転前に時々ろれつが回らないときがありました。

眼球上転中の職員または他者との会話は取れていました。

2、眼球上転中の対応

寮内で眼球上転が見られたときは転倒などに注意をした。また、トイレにこ

もっているときには定期的に声をかけ注意をした。

３、眼球　上 転時の具体例

①平成１３年７月２３日、入浴 時に眼球　上 転が起こる。

入浴　中 に 眼球　上 転が始まる。職員 は他の利用者の 入浴 援助をしており、本利用者は浴槽 に浸かっていた 状態 であった。本利用者はいつもゆっくり長めにお湯に浸かっているのだが、そのときに限って早くにあがるため見ると眼球 が上 転をしていた。

職員 が「大丈夫 か？」と尋ねると、 上 転をしながらうなずき浴槽 内の階段をゆっくりと確かめながら湯船からあがりお風呂チェアーや湯桶などを避けながらつまづくことなく脱衣所に行き、着替えていた。

着替えた後、トイレに（こもり）すわる。ときどきトイレに様子を確認しに行くと鼻をしきりにかみ、首を何度もかしげることを繰り返していた。「大丈夫 か」と尋ねると

「だいじょうぶ」と答えていた。

夕食 時に声をかけると、まだ眼球　上 転は収まっていなかったが、食事のためテーブルにつき 夕食 を食べた。夕食 後には上 転が終わっていた。

②　宿泊 旅行 中 に 眼球　上 転がおきる。

平成１４年１０月９～１０日　宿泊 旅行 で草津に行く。夜、 宿泊 先のホテルにて 夕食 にビールをのみ食事を楽しむ。ビールを１杯飲んだところで本利用者が 眼球　上 転を始める。カラオケの 順番 の最後に 眼球　上 転をしながらも１曲 歌った。

平成１６年２月２９日

ひいらぎ寮　職員　田平　芳久（自筆）　印

陳述書

佐藤 進 さんの 眼球 上 転時の 状態 について

私 は佐藤 進 さんが 眼球 上 転した時の 状態 について以下のとおり 陳述 いたします。

なお、佐藤 進 さんについて 柊 寮 において平成１３年４月から平成１４年で生活支援を担当していました。

散歩 中 にて

１．ＴＫショップの前にて

単独で買い物しているときに 職員 たまたま百草団地のＴＫショップ前にて 眼球 上 転しているのを見かける。 眼球 上 転しつつもしっかりとアイスを座って食べていた光景を目撃。

２．単独で買い物 中

帰寮 中 に 眼球 上 転を起こしたらしく、そのまま帰寮。「買ってきた」と話し、職員 に品物とお金をきちんと渡す（ 眼球 上 転は継続 中 ）。その後本人は部屋に戻る。直ると 職員 室に戻り、「買ってきた、買ってきた」と何度も話しかけてくる。また、何を買ってきたかはしっかりと記憶をしている。

３．多摩動物園 にて

多摩動物園 に行った帰りに 動物園 トイレに寄り、その間に 眼球 上 転が始まる。しかしすぐにトイレから出てきてしっかりとした足取りをして帰寮。帰寮 の歩行 中 はしっかりとした足取りだった。

＊　共通 事項として言葉が 急激 になくなる。

＊　話しかけに対してはうなずいたり、「うん」とのしっかりとした反応はある。

寮内 では

１．トイレにて

自 らトイレにおいて座りながら 眼球 上 転を起こしているのを頻繁に見かける。「だいじょうぶ？」との声かけに対して「うん」との返事があり、また 眼球 上 転 中 トイレットペーパーを何度もちぎってはトイレの 中 に捨てていた。約１時間ほど座っていた。

２．入浴

眼球 上 転 中 は決して浴室に行かず、直ってから 必 ず 入浴 をしていた。

平成１６年３月１日

柊　寮　職員　　田倉和子（自筆）　印

陳述書

佐藤 進 さんの 眼球 上 転時の 状態 について

私 は佐藤 進 さんが 眼球 上 転した時の 状態 について以下のとおり 陳述 いたします。

なお、佐藤 進 さんについて 柊 寮 において平成１３年４月から平成１４年まで生活支援を担当していました。

買い物へ出かける時は普通の 状態 だが 眼球 上 転しながら帰寮することがあった。
その時の様子 …
毎回買いたいものをメモして持参していたが、間違えることなく希望するものを買って帰ってきた。
レシート、おつりを忘れず持ち帰り照らし合わせても計算は合っていた。
職員 との会話はできた。
おっりの受け渡し　買い物の様子、その後の予定などを話した。
「○○さんと会ったよ」
どら焼き、個売りのものを買うと言っていたが５個入りを買ってきたので訊ねると
「売っていなかった、それ（五個入り）しか売っていなかった」

寮 の中では 眼球 上 転したときは 自 ら洋式トイレに座っていた。
その際も会話できた。
大丈夫 ですか？
「うん」
ご飯ですよ
「食べる、食べる」
お風呂はどうします？
「入んない」

平成１６年３月１日
ひいらぎ 寮 職員　木村祐子（自筆）　印

陳述書

佐藤　進さんの眼球上転時の状況について

私は佐藤進さんが眼球上転した時の状態について以下のとおり陳述いたします。

なお、佐藤進さんについて柊寮において平成９年４月から平成１４年まで生活支援を担当していました。

○　寮外出（平成１２年２月１９日　立川へ　）

外出は本人楽しみにしており、そういう日は朝起きるのも早く、早くから外出着に着替えて、出かけるのをせかす程である。気分もいいのか付添い職員にしつこいくらい話しかけ、四六時中しゃべりっ放しといった感じである。昼食後、「トイレに行って来る」と言うので、男性トイレに入るのを確認し、しばらく待つ。１０分程過ぎてもトイレから出て来ず、大便かと思いトイレの前で待つが出て来ない。（どの位待ったか不明）人のいなくなった所で、トイレに行き声かけると、大便トイレより返事がある。鍵が掛かっているので本人に開けるよう声かけすると開けたので見ると、便器に座ったままトイレットペーパーを契り、お尻を拭き、その紙をトイレに流す、を繰り返している。まだ便が出るのかと思って様子みるが、出る様子なく強引にズボンを上げ、外に連れ出す。本人は「未だ便が出る」と言うが眼球が上転していたので、そのまま外に連れ出し、もう出ないからと話し帰路につく。寮に帰るまでは言葉数少なく、こちらの問いかけには答えるが本人からの話しかけはない。職員の後に付き（歩くテンポは遅い）寮に帰る。帰寮後はしばらくトイレに入っており、夕食の時には、元に戻りいつもの生活を送っていた。

○　衣類購入（平成１３年１月３１日　立川へ　）

３人の利用者と一緒に立川まで買物に行く。この日も機嫌よく、衣類の買物では、買い物カゴを持ち、自分で選んだ洋服を「これでいい？」「あとこれ買っていい？」とその都度職員に聞きに来て、嬉しそうにカゴに入れていた。昼食も本人の希望のお店に入り食べる。昼食を食べ、外出の用件が済んだ頃（この日は立川のモノレール駅に歩いて帰る途中）今までよくしゃべっていたのが、無口になっているので見ると、眼球が上転していて、大丈夫？と聞くと「うん」と言葉少なに返事する。階段やエスカレーターでは、職員が気になったので傍に付くが、慎重に、一般一段上転している目を、時折頭ごと下に向けながら登りモノレール駅へ。こちらから話している事はわかるらしく、問いかけには「うん」という返事が返っ

てくる。時間的には１５：００頃～１６：００頃だったように思う。帰寮後、上転が戻ると「今日行った買物は楽しかった」と、又良くしゃべっていた。

○　トイレにて

日常的な場面で眼球が上転していたのは、午後３時頃～午後６時頃に見受けられた。クラスから帰り、入浴の声かけしようとした時、姿が見えないので捜すと眼球上転させながら洋式トイレに座っていた。３０分程で治まりトイレから出てくる事もあれば、１～２時間過ぎても治まらずトイレに座り続ける事もあった。余り長い時には、強引にトイレから出し、自室に戻すか食堂に連れて来て、夕食を摂るよう働きかけた。そうなると再度トイレに自分から戻る事もなく部屋で休んでいたり、時間がかかるが夕食を摂ったりしていた。

２００４年２月２７日

ひいらぎ寮　職員　木村澄江（自筆）　印

陳述書

佐藤進さんの眼球上転時の状態について

私は佐藤進さんが眼球上転した時の状態について以下のとおり陳述いたします。

なお、佐藤進さんについて柊寮において平成１３年４月から平成１４年まで生活支援を担当していました。

○　眼球上転の状態で、買い物から帰ってきたところを、玄関先で見かけたことがあります。

「大丈夫ですか。」と声をかけると、ご本人は、眼球上転していましたが「大丈夫。」と返事していました。

意識はしっかりしていて、２階に向かう階段も、手すりにつかまらずに、危なげない様子で上ってゆきました。

○　トイレおよび、自室で眼球上転している場面をよく見かけていました。

部屋ではティッシュで鼻をかんでいました。

トイレでは、便座に腰掛けたまま眼球上転していました。

どちらの場面でも「大丈夫ですか。」と声をかけましたが、ご本人は「大丈夫。」と返事していました。

平成１６年２月２６日

ひいらぎ寮　職員　　早川範子（自筆）　　印

陳述書

佐藤 進 さんの 眼球 上 転の 状況 について

私 は佐藤 進 さんが 眼球 上 転した時の 状態 について以下のとおり 陳述 いたします。
なお、佐藤 進 さんについて 柊 寮 において平成１２年 ４ 月から平成１４年まで生活支援を担当していました。

＜会話＞
上 転 中 も話しかけると一言二言で答えていた。
例えば、食事に来ないので多分トイレかなとそこへ行き、声をかけると「行くよ」と答えていたなど。

＜歩行・買い物＞
上 転 中 に脱衣 場 からトイレへ、または部屋からトイレへ移動しているのは見た事があるが、 上 転 中 に出かける事はなかった。
ただ、買い物に出かけているときに上 転になり、 眼球 上 転しながら帰ってくる事はあった。
でも買い物はきちんと済ましてきている。

衣類 購入 に行ったとき、買い物も終わり、お茶を飲んでいるときにトイレに入りたがり、見ると 眼球 上 転の 状態 になっていた。

＊一日の中で、気分の高まることがあった後によく 眼球 上 転になっていた。
外出 や他の利用者とのトラブルがあったときなど。夕方が多かった。

＊　眼球 上 転になるとトイレに入りたがった。

＊　時間的には３０分から一時間ほどだった。

平成１６年２月２７日

ひいらぎ 寮　職員

矢崎由加（自筆）印

陳述書

佐藤 進 さんの 眼球　上 転について

私 は佐藤 進 さんが 眼球　上 転した時の 状態 について以下の通り 陳述 いたします。
なお、佐藤 進 さんについて 柊　寮 において平成８年度～平成１４年度まで生活支援を担当していました。

入浴 場面での 眼球　上 転は、よくそうにつかっている時に起きることが多かった。お湯に浸かっている時間は長くなかったが、その間に 上 転を起こしていた。
上 転を起こしていてもひげを剃ってもらうため洗い場にあがり、椅子に座って順番 を待っていた。
上 転をした時は、つばを吐く行為が見られた。つばは出ないが、何度となくつばをはいていた。
また、 上 転時にはしゃべらなかった。しかし、こちらの問いかけにはしっかりと答えられていた。
行動は普段と違い緩慢になるものの、自分で服を着てしっかりとした足取どりで浴室を出て行った。

寮　外出先 でも 上 転があり、よくトイレに入り込んでいた。大便器に座り内側からカギをかけて２０～３０分は出てこなかった。 外出先 でもあり何度も声かけをしてようやくカギをあけ出てきてもらった。

週末 の買い物は単独で行っていたが、帰り道に 上 転をして帰ってくる事があった。黒目が上にあがった 状態 なので前がみずらかったと思うが、しっかりとした足どりでひとりで帰ってこられた。

週末 の散歩に２～３キロの 所 にある 動物園 に行ったときも 上 転を起こした事があった。園内を散策 中 と帰り道に 上 転を起こすことがあったが、２０～３０分のみちのりを自分で歩いて帰ってきた。

どのような場面で 眼球　上 転を起こしても 共通 していたことは、 必 ずトイレに

入り込むことだった。様式便器に座っていたが小便を出し切ってしまった後も上転をしているときは残尿感があるらしく声がけしても「まだ出る」と言って、長いときは１～２時間出てこなかった時もあった。このときもつばを吐いていた。

平成１６年３月１日

元ひいらぎ寮　職員　　吉川 吉昭（自筆）印

陳述書

佐藤進さんの眼球上転時の状態について

私は佐藤進さんが眼球上転した時の状態について以下の通り陳述いたします。

なお、佐藤進さんについて柊寮において平成９年度～平成１４年度まで生活支援を担当していました。

◎　Ｈ１５．１．７の就前の薬を２０：３０に服用し、夜間良眠する。
　　Ｈ１５．１．８の朝、７：４０に朝食準備に２階へ行くと起きて、娯楽室のソファーに座っていた。
　　元気にあいさつし、食事を摂り、食後のコーヒーを飲み、８：４５にはクラスへ行くと１階に下りていく。

◎　眼球上転時の状態

○　自分にとって「うれしいこと」がある、買い物に行き好きなものを買える時、寮外出で出かける等　そういう時に上転あり。
　　また、身体が疲れ時等も上転していた。

○　眼球上転をした時は、トイレにこもり２～３時間出てこない時もあり、排尿した後でも残尿感（？）があるのか、ずっと洋式トイレに座っていた。ペーパーも使用料が多かった。様子を見にいき、声がけをすると必ず返事はしていた。

○　眼球上転をしている時は、口数少なく静かだった。
　　動きは緩慢になったが、足元がふらついたり、話ができない等ということはなかった。

○　眼球上転時には本人がこだわったのは、トイレにこもること。
　　ずっと座り、ペーパーで何回も拭いていた。
　　食べ物や水のみにこだわることなし。とにかく、トイレにこもることは、上転時必ずあり。

○　午後、上転すること多かったと思う。（訓練棟から帰寮後、寮外出時、夕食の前後）

平成１６年３月１日

元ひいらぎ寮職員　山下恵子（自筆）印